様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ９ 月 １４ 日現在

機関番号：３２５１４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７０１０２

研究課題名（和文）中世・近世期の有職故実書調査・研究と、平安朝文学研究への活用実践

研究課題名（英文）Research of Yusokukojitsu Statement and application of the results

研究代表者
森田　直美（MORITA, NAOMI）

川村学園女子大学・文学部・講師

研究者番号：１０５５２９４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、中世・近世期に成立した、平安朝文学に関わる有職故実書を調査・研究し、その成果を平安朝文学読解に還元することを主な目的とする。今回は、中世期の一条兼良とその周辺人物、および近世中期の壺井義知・伊勢貞丈、近世後期の斉藤彦麿・松岡行義らの事績を主な調査対象とした。各人物の事績の調査・研究を通して、その特徴や連関性が明らかとなった。
また、こうした有職関連の事績調査を踏まえ、その成果を『源氏物語』の「聴色」実態解明、平安期和歌に見える「紅のふりいづ」といった表現の実態解明等に還元した。

研究成果の概要（英文）：I researched Yusokukojitsu Statement of Edo period from the Kamakura period.The subject were books of Yoshitika Tuboi and Yukiyoshi Matsuoka and Teijou Ise. Relationship of each of the books became clear.
And I was applied to the reading of the Heian literature the results of the investigation.

研究分野：平安朝文学

キーワード：平安朝文学　有職故実学　注釈　一条兼良　壺井義知　伊勢貞丈　松岡行義　斉藤彦麿

１．研究開始当初の背景

筆者はこれまでの研究活動を通して、現在の平安朝文学研究の場では、作品に散見する色彩や装束、染色や調度品に関する描写に対し、その実相を理解し、具体的な像を思い描きながら記していると看取できる訓注が、非常に少ないことを痛感してきた。一つひとつの色彩や装束について、定説として通行している説の中にも、突き詰めてみると、やや根拠が曖昧で、その妥当性の判断がつきにくいものも見受けられる。

平安朝文学研究の場で、色彩・装束・調度品に関する事項の追究を促進し、作品読解に還元するためには、平安末期から近世にかけて生み出された有職故実書や考証書を有効に活用することが肝要である。しかし、特に中世後期から近世期に成立した有職故実書や考証書の多くは、これまでの平安朝文学研究にほとんど活用されていないのが現状である。

以上の様な問題意識から、まず特に江戸期における平安朝文学を材とした装束・調度学の内容や展開を明らかにし、学界に呈することが急務と考え、従来あまり用いられていない中世・近世の有職故実書の調査を推進することを目的とし、研究をスタートした。

平成 22～23 年度には、科学研究費補助金を受け、「平安朝文学にあらわれる装束・調度品描写研究のための近世有職故実書研究（課題番号 22720095）」を遂行した。この研究によって、特に近世後期における平安朝文学を材とした有職故実書の調査・研究・翻刻等を進め、文学研究にも活用しやすい形で学界に呈することができた。更に、従来あまり用いられていない中世・近世の有職故実書を積極的に使用し、平安朝文学研究における有用性を実践的に示した。この実践にあたっては、調査によって見出した有職書・考証書を、平安朝文学の読解に還元することも視野に置いた。

そして 25 年度からは、23 年度までの成果を踏まえ、「平安朝文学の作品読解における中世・近世成立の有職故実書の活用実践」に、より比重を置くこととした。具体的には、幾つかの作品における場面読解の実践を通して、従来の学界での研究の問題点や、今後の研究における有職故実資料活用の必要性を戦略的に伝えるべく、論文発表・口頭発表を重ねることを目標とした。また併せて、これまで行ってきた中世・近世期の有職故実書の調査・研究も、更に推し進めることも目的の一つとした。

２．研究の目的

１．に記した背景から、本課題の目的として設定したのは、以下の 2 点である。

① 有職故実資料を活用し、平安朝文学作品の読解の実践例を示してその有用性を示すとともに、現在の平安朝文学研究の場における『源氏』古注釈の偏重に警鐘を鳴らす。

② 中世から近世中期までの、平安朝文学に関わる有職故実書の調査・研究。調査対象は、近世後期の松岡行義・斉藤彦麿、近世中期の壺井義知・伊勢貞丈、中世期の一条兼良とその周辺人物を中心とする。

３．研究の方法

２．の目的を遂行するために、おおむね以下の手順で調査・研究・報告（発表）を行った。

① 日本古典籍目録等のデータベースや、全国の主要図書館・文庫の目録調査を用い、本研究において調査対象とする人物・時代の書物を選定。

② ①によって選定した書物の内、特に重要と思われるものから、国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルムや紙焼き、インターネット上で閲覧できるデジタルアーカイブに提供されている写真資料等を通して調査を行った。それらがないものや、実見が必要と思われるものに関しては実地調査によって、調査を行う。

③ ②の調査を通し、平安朝文学の読解に特に有用と思われる著作に関しては、翻刻・解題を発表。

④ ②の資料調査、③の翻刻・解題作業を行った著作をはじめとし、中世から近世後期に成立した有職故実書を活用し、平安文学作品の考察を実践した成果を、口頭発表・論文によって公開。

４．研究成果

平成 25 年度は、主に松岡行義・斉藤彦麿と、その師匠筋にあたる伊勢貞丈らの事績を調査・研究した。

まず、松岡行義については、その著作である『源語問答』の調査を行い、翻刻・解題を発表した（研究業績：雑誌論文②）。この作業を通して、行義が有職学に特化した『源氏物語』の注釈書を記そうとした経緯の一端を明らかにすることができた。本書の内容によれば、行義は、日常的に周囲の人々から質問を受けており、それに応えるという問答がたびたび行われていたと考えられる。その経験を通して、行義は、『源氏物語』の注釈書の中でも、特に建築や装束、調度品などに関する解説書が必要だと感じたのだろう。後に行義が、これらに建築や調度品に特化した注釈書である『源氏類聚鈔』をまとめ上げてゆく過程段階を知る上で、『源語問答』は貴重だと言える。

また他に、行義や彦麿を含む近世有職学に大きな影響を及ぼしたと考えられる、一条兼良の事績についても考察を深め、論考を執筆した。兼良の著作『江次第鈔』の叙述を精査し、兼良が有職書を記すにあたって重要視したのは、前時代の様式を寸分たがわず引き継

ぐことではなく、基本を押さえつつも時代時代の状況や需要に見合った様式を模索するための、検討材料を提供することにあったと結論した（研究業績：雑誌論文①）。

そして平成 26 年度は、一条兼良、およびその周辺人物の事績を中心に文献の調査・研究を行った。具体的には、天理大学附属図書館が所蔵する、一条兼良の貴重な書入れを含む『江次第鈔』などを調査した。

また、有職書の調査・研究を平安朝文学の読解に還元する作業として、『うつほ物語』に見える「紫」をめぐる贈答歌を取り上げた。この論考は、従来解釈に難のあった『うつほ物語』の作中和歌を、伊勢貞丈の著作『貞丈雑記』の記述などを考察材料として用いつつ、再検討したものである。当該贈答歌には、紫の染色工程が表現に影響をおよぼしているとかんがえられる。後代の染色に関する有職書を基に、古代の紫草による染色や、染料の特性が、和歌の生成に、どうかかわっているのかを論じた（研究業績：図書①所収の拙稿「平安朝の和歌と染色・染料―『うつほ物語』の「紫」をめぐる贈答歌を中心として―」）。

他に、『源氏物語』に 4 度記される「聴色（ゆるしいろ）」について、論考を発表した（研究業績：図書②所収の拙稿「服飾による創造を読み解く―『源氏物語』の「聴色」をテーマとして―」）。従来聴色は、「紅の薄色」と解釈されてきたが、そう捉えた場合、物語本文の読解にいくつかの問題点が生じることに疑問を覚えた。そこで、中世・近世期の有職書や物語注釈の記述を考察材料として用い、物語本文との整合性という観点も含めて再検討を行った。その結果、聴色は「紅の薄色」ではなく、「梔子色の薄色」とするのが穏当だと論じた。そう結論することによって、場面解釈への疑問も払しょくされた。なお、この拙稿は、陣野英則氏によって、「すぐれた考証を示した」、「有職関係の注釈に関わる問題提起も重要である」との評価を得た（『リポート笠間』第五七号（二〇一四年一一月）の「学界時評」）。

最後に、平成 27 年度は、文献の調査や翻刻については壺井義知、伊勢貞丈の著作を中心に行った。具体的には、京都大学付属図書館が所蔵する『壺井氏令解』、天理大学付属図書館が所蔵する『在原業平伝』を調査した。この調査を通して、中世期と近世後期をつなぐ近世中期有職学の特徴を看取することができた。すなわち、義知や貞丈は、一条兼良の『花鳥余情』をはじめとする中世期の事績に影響を受けつつも、その内容をただ鵜呑みにして引き継ぐのではなく、平安期に成立した物語や日記作品も考察材料として用い、丹念な検討を行っている。つまり、一条兼良の見解に非常に従順であった中世期の国学者、有職故実家に比べて「原点回帰」、もしくは「研究」的な姿勢が深まっていると言える。そして、その傾向は近世後期の松岡行義や斎藤彦麿へと引き継がれている。

また、伊勢貞丈の著作『今昔物語問答』（筑波大学付属図書館蔵）の翻刻・解題を発表した（研究業績：雑誌論文④）。本書からも、壺井義知の『在原業平伝』などと同様に、中世期と近世後期の間をつなぐ中間的な要素が見て取れた。

さらに、有職書の調査・研究を平安朝文学の読解に還元する作業としては、亭子院歌合出詠歌に見える「月草のうつし心」をテーマとして論考を執筆した（研究業績：雑誌論文③）。

平安期の和歌に散見する「月草のうつし心」という表現は、従来「移り気な心」と「気丈な心」という対極的な解釈の間で揺れ、定説を見なかった。そこで、有職書や物語注釈書の月草染めに関わる記述を精査し、これは従来の解釈で理解することはできないと考えた。そして、先行研究にうたわれていない、「人に移り染まった恋心」と捉えるのが穏当だろうという、第三の結論を呈するに至った。

また別に、『古今集』収載歌などにみえる「紅のふりいづ」という表現に関しても、古代染色研究の成果や、中世・近世期に成立した染色関連の有職書を頼りに、フィールドワークの成果も踏まえて再検討を行った。

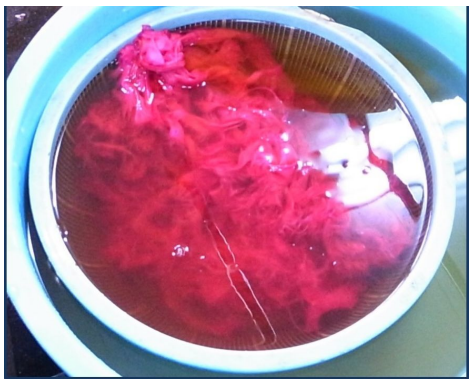
従来「紅のふりいづ」は、染色に関連する表現だとされながら、「ふりいづ」の指し示す実態についての理解はあいまいであった。

従来有力視されてきた説としては、

(1)染液の中で布を振り動かすこと

(2)紅に染めた布から染料を振り出すことの二説がある。この二説の内、文献の再調査とフィールドワークとを踏まえ、「ふりいづ」とは、紅に染めて保存しておいた麻布から、再び水に色素を振り出し、染料を作る動作だと結論した（下に、京都伏見の染司よしおかにおける、紅染色フィールドワークの写真①～④を貼付する）。この成果は、和歌文学会例会での口頭発表を通して学界に報告した（研究業績：学会発表②）。また、近く脱稿論文を発表する所存である。

【京都伏見 染司よしおか における
紅染色のフィールドワーク写真】



①〈紅で染め、保存しておいた擦切れの麻布〉

②〈灰汁液の中で麻布をこまかく振る〉

③〈布から染料が振り出される＝ふりいづ〉

④〈振り出した染料で絹を染める〉

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 森田　直美、『江次第鈔』発題に見る一条兼良の有職故実観―古注釈を知り、古典文学を読むことを見据えて―、瞿麦、査読無、第 28 号、2013、15-19
② 森田　直美、宮内庁書陵部蔵『源語問答』翻刻・解題、日本女子大学文学研究科紀要、査読無、第 20 号、2014、41-47
③ 森田　直美、「月草のうつし心」は「浮気心」か―亭子院歌合出詠歌の解釈を目指して―、瞿麦、査読無、第 30 号、2016、pp 未定
④ 森田　直美、筑波大学付属図書館蔵『今昔物語問答』翻刻・解題、川村学園女子大学研究紀要、査読無、第 27-1 号、2016、pp175-164

〔学会発表〕（計 2 件）

① 森田　直美、平安朝の和歌と染色・染料―『うつほ物語』の「紫」をめぐる贈答歌を中心として―、和歌文学会例会、2013 年 12 月 21 日、白百合女子大学
② 森田　直美、紅染色における「ふりいづ」その実際と和歌表現とのかかわり―、和歌文学会例会、2015 年 5 月 16 日、学習院大学

〔図書〕（計 2 件）

① 森田　直美 他、武蔵野書院、王朝文学を彩る軌跡、2014、395
② 森田　直美 他、竹林舎、虚構と歴史のはざまで 新時代への源氏学第 6 巻、2014、311

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者

森田　直美（MORITA　Naomi）
川村学園女子大学・文学部日本文化学科・講師
研究者番号：10552945